

〈報告〉

不登校生徒に対する訪問相談の導入

山田 泰行*・田中 純夫**

The introduction of a home visiting counseling system for students
with school refusal

Yasuyuki YAMADA* and Sumio TANAKA**

1. 初めに

不登校児童生徒が全国的に年々増加傾向にあり、文部省の調査によると平成13年度では13万9千人に上り、過去最多を更新し続けていると報告されている。さらに不登校の要因、背景についてはその多様化、複雑化が進み、要因に応じた適切な対策が求められている。不登校に関する取り組みの改善を図ることは、義務教育制度の趣旨からも重要な課題となっている。

Z市教育委員会ではこの不登校問題の解決に向けて、学校における生徒指導や教育相談の充実を図るため各事業を推進するとともに、相談機関においても教育相談活動の充実を図ってきた。その一環として平成9年度より適応支援センターを開設し、長期化、複雑化、多様化の傾向にある不登校児への対応と児童生徒の自立と学校復帰を目指した援助活動を行っている。さらに平成15年度より、心理的な問題により家庭に引きこもり、教育相談機関等へ出向くことができない児童生徒に対して、適応支援センターより臨床心理学の専門家や大学院生、教員免許取得者を指導員として派遣する「訪問相談員」というシステムを導入した。これは訪問相談による不登校児童生徒との人間関

係づくりや、保護者との面談を通して、彼らを学校や相談機関へ繋げていくことをねらいとしたものである。

実際の教育現場では、児童生徒の状態の回復や学校復帰に向けて、教師の家庭訪問が効果をあげている場合も数多くあるものの、一方では、児童生徒や保護者の学校に対する抵抗感が強いために、あるいは学校側からの強引な介入によってかえって関係をこじらせることになってしまうなど、学校に所属する職員ではなかなか子どもや家族と接触できないケースもめずらしくない。こうした不登校の多様な状況に対応するために、家庭と学校の両者の間を繋ぐ役割として、中立的な立場にある者がその役割を果たすことの意義は大きく、学校とは別の機能をもちながら学校と密接に連携のとれる機関による訪問型支援が、近年注目を集めておりその成果が期待されている。

本研究は、中学2年生の引きこもりがちな生活を送る不登校生徒に対して行われた半年間の訪問相談の事例を採り上げ、適応支援センターにおける訪問相談員導入の効果を検証し、今後より効果的な訪問相談を築いていくために資することを目的とする。

2. 方法

2.1 対象

〔クライアント〕S, S. (13歳中学2年生)
(当センターインテーク時)

* 体育心理学研究室
Seminar of Psychology of physical education

** 教育心理学研究室
Seminar of Educational Psychology

〔主 訴〕登校拒否

〔家 族〕父 (以下 Fa) : 会社員, 母 (以下 Mo) : 家事・パート, 兄 (以下 Bro : 高 2)

2.2 期間および訪問回数

X年3月～8月の6ヶ月間に、週に1回程度の割合で、合計19回の家庭訪問を行った。

3. 経 過

(1) インテークまでの経緯

- 小3～4…気持ち落ち込む。Moに怒られるので仕方なく登校していた。
- 小5～6…小5のとき、給食中に同級生に嫌なことを言われたのがきっかけで不登校に。人目を気にして自宅に引きこもりがちな生活を送る。
- 中1…春は学校に行くことができていたが、廊下や保健室で同級生に嫌なことを言われたため、保健室登校、別室登校を経て再び不登校に。
- 中1以降の家庭での状態…昼夜逆転で運動不足の引きこもりがちな生活。TVゲームをしていたが、秋以降は何をするでもなく放心状態であることが多い。
- 中1-3月…Sの所属する中学校の養護教諭のNより適応支援センター職員のKに訪問相談の依頼が来る。Moが訪問相談の導入に理解を示していることや、家で引きこもりがちな生活を送っていること。また、Sの生活環境に適切な男性のモデルがないことに問題があるのではないかと、というNの主張から、スクールカウンセラーも含め、このケースに訪問相談の導入が適合するかもしれないと判断したため、訪問相談の導入が決まった。

(2) 訪問指導の経過

1) インテーク時 (X+3月)

初回：Cは訪問に先立ち、Sの不登校に至った理由や現在の状況について簡単に聞かされていた。また訪問相談の導入について、Sは「もしお兄さんが来るならゲームよりも話がしたい」と期待感を見せたが、「実際に来てもらうかは僕の決めることじゃない」という消極的な発言も見られたこと。CはMoから、Sが相談員との活動の中で、少しでも不快な表情を見せたときは、自らの

判断で訪問を中止するつもりであることを知らされていた。そのような経緯から、初めはそうやすやすとは会ってほしくないのではないかという不安があった。玄関のドアを開けるとMoが正面に立ち構え、Sはその後ろに隠れていた。Sはおどおどして足は震えており、手を落ち着きなく揺らしていた。体型は小太りで肌は色白であり、ほんやりした表情からは無気力な印象を受けた。Moは観察するような視線でCを眺め、「今日は玄関まででお願いします」と言って警戒心をあらわにした。10分程度だったが、玄関先で簡単に自己紹介をし、来週も会いに来ることを告げ、第1回目の訪問を終了した。

※ ※ ※

2回目の訪問の直前、前回の訪問後にMoと直接連絡をとったNから、親子でCに対して好印象をもってくれたようであると伝えてくれた。

第2回

応接室に通されて、CとMoとSの3人で談話するが、SはCへの対応は殆どMoまかせで、横から2人の会話に耳を傾けているだけだった。

Sは訪問の前日に「食べ物は何が好きですか。」など、Cと話す内容についてMoも一緒になって準備していたようであった。そのために、決められていたと思われる質問以外では自発的に話し出すことはなく、その質問はそれまでの話の流れを全く無視したものであった。Sに話しかけてもMoが代わりに答えてしまうため、Moは会話の中心であり続けた。

※ ※ ※

母親に依存した会話が日常になっているためか、Sは自ら考えることを放棄しているようであった。

比較的早期に一応のコンタクトに成功したといえようが、Sの人への警戒心と親子間の密着にはかなり根深いものがあるとCには感じられた。

2) 4月の経過

この時期はSとの間にコンタクトをとろうと努力が払われた時期である。TVゲームやトランプなどの遊びを通してCとの信頼関係が形成されていった。そしてSは様々な活動を通して大

きなエネルギーを獲得し、後半は「このままでは何も変わらない」と言って、職員室や適応支援センターにまで足を運び、さらに「目的さえあれば外出できる」と言って、2回ほど一人でゲームや本を買いに出かけることができた。

その一方で、「僕が学校に行っていれば今頃は」と現在の状況を後悔し、「なぜ学校に行けなくなってしまったのか」について考え込み、すべての原因をMoのせいにして怒り、落ち込む事態がときどきみられた。

※ ※ ※

この時期はMoへの敵意が顕在化したことが特徴である。依存と反抗の間を揺れ動くようであったが、母との間に心理的分離不全を起こしているようでもあり、家庭内暴力的な傾向が出現しないかどうかをじっくり見ていく必要があると考えられる。今後、家庭内での攻撃衝動が高まってくる場合もあるだろうという予測に基づいて慎重に対応していかなければならないと決意した。

3) 5月の経過

活動内容は、1回だけ適応支援センターまで行ってボードゲームをした他は、談話やTVゲームが殆どであった。この頃になると、SはCからの問いかけに対して自分の口から答えるようになる。また、ときにはSの方から話題を提供してくることもあり、Moに依存しない発言が見られるようになってきた。さらに、Sにとってどんなに後ろめたい内容の話であっても、Cは怒らずに受け入れてくれる人間であると理解してくると、活動に気が向かないときは自分の口から断ることができるようになる。

しかしこの時期は、急に活動的になった4月の反動も表面化してきた。Sは職員室や適応支援センターまで行けたことを成長と捉えていたが、「一度行ったからには毎週行かなければならないものだ」という責任感と、「きっとCもそれを自分に期待している」という思い込みから、プレッシャーを感じてしまったようであった。それが梅雨による雨天続きの悪天候が影響して、そのペースが途絶えてしまったことや、自発的に始めたジョギングが、怪我ですぐに挫折してしまったこと

がSを苛立たせた。さらに蒸し暑い夜が続いたことで、家庭内において不機嫌になりかんしゃくをおこすことが増えていた。「部屋を片付けろ。僕は機嫌が悪いんだ」と言ってMoにあたるだけでなく、Faに反論し、Broと喧嘩するといった攻撃行動も多く見られた。また不登校の後悔による落ち込みが週に1回程度の周期でみられた。

※ ※ ※

走るときは一時間近くも走り、最終的に怪我を招いたジョギングからも推し量ることができようが、Sには中途半端や、曖昧な状況を受け入れる耐性が著しく欠けているように思われた。

4) 6月の経過

この時期は不機嫌な日が続いた5月期の不調を考慮し、学校や適応教室に関する話題を控えるなどして、Cからの登校刺激になるようなアプローチを抑えた。するとSがCにはなかなか話題にしようとはしなかった、進学や就職などの将来に対する不安を自ら口にするようになった。そのために、訪問中は相談を持ちかけられることが多かった。しかしその一方で、高校進学に向けてサポート校を調べるためにCと適応教室に行くという前向きな行動に移ることもできた。放課後2回ほど職員室に行ったことや、月末にはMoと県外まで幼馴染に会いにでかけたことも等も勘案すると、行動面では比較的に活動的な期間だったといえる。

※ ※ ※

将来についての不安による落ち込みは、これまで見られなかったことであり、Moから見ても「進歩だ」と感じられる状態であった。ようやく、現在の自己の苦境を、他者によって陥られたものとしてとらえるだけでなく、自己の問題としても考えられるようになってきたのであろう。しかしながら気持ちが前向きになった分だけ、完全主義のSにとっては理想と現実の差をリアルに意識することになり、より深い落ち込みをもたらす結果となっていくようであった。

さらに、Cの訪問日の前日に落ち込むことが多くなってきたことも特徴的である。Cが週に1度、定期的に訪問を続けたことによって、引きこ

もりがちで昼夜逆転の生活といった現実の問題や、自分の将来と向き合わざるを得ない状況を作り出したとも考えられる。

5) 7月の経過

夏休みを控え、問題の解決に向けて現実は何ができるかについて話し合った時期である。将来不安が高まる上、「もう学期末なのに1度も学校に行けていない」と話し、日増しに深い悲しみに落ち込んでいくSには、TVゲーム等の遊びを通して元気付けるといった問題回避的な対処や、悩みを聞いて気持ちをなだめるといったやり方では通用しなくなってきた。これまで落ち込むと、きまってMoになだめられ、無理に登校を考えなくてもよいと言われてきたSではあるが、その効力にも限界が訪れたようで、「学校に行けることが一番いいに決まっている」と言い返すようになる。

また、このころから身体の不調を訴え始め、病気を疑うようになる。病気は思い込みによるものと考えられるが、「思考力が低下しているから頭の中を全部検査してほしい」、「口と脳が繋がっていないから考えて話せない」等と主張して通院を要求することもあった。

そこでSの悩みを整理した上で、①学習の遅れ、②昼夜逆転の生活、③病気の疑われる身体症状、の3点に介入の視点を定め、無理のない範囲で行動できる解決策を話し合い、夏休みの計画を立てることにした。

その結果、Cの指導のもと、数学に取り組むことに決まった。本格的な教科の学習に取り組むことが進路などの将来についての不安に苦しむSの自信と安心に繋がると考えたからである。その他に、昼夜逆転の生活の対策として、午前中に見たいTV番組を決めて、それを見るために起床することを目標にした。病気の疑いについては、訴えが思考力の低下や、頭が冴えないなど様々であり、本当に病気によって実際にそのような症状が出てくるのかについて、もう少し慎重に考えていこうと提案した。

現在の状況から脱けだすために夏休みの目標を立てるという前向きな行動は、Sを安心させたよ

うである。特に数学の学習には積極的であり、夏休み前から開始された。

※ ※ ※

現在の苦境は自分の不甲斐なさによってもたらされたのではなく、病気だから仕方のないものであったと考えることは、Sの罪悪感や自我矮小感を軽減させているのかもしれない。Sの病気の訴えにはこのように日常の問題事象を全て病気に原因帰属させようとするという、いわば「疾病への逃避」というニュアンスが色濃くあったように思われる。

6) 8月の経過

夏休みを通して、Sと共に夏休みの課題を進めた時期である。中でも数学に取り組んだことは大きな変化をもたらした。Sは数学の理解は予想以上に速く、僅か3回の訪問中に一学期の内容をほぼ網羅してしまった。また宿題に対しても積極的であり、1度教えたことは次週までには完璧なものにしていた。分数の計算でつまづいていることを指摘すると、自発的に計算ドリルを買って取り組み、「分数の計算は完璧です」と自信満々に話すこともあった。昼ごろに勉強を終えると、午後には本を買いに行くなどの目的を持って外出することも抵抗なくできた。

特筆すべきことは、これまで途絶えることのなかった定期的な落ち込みが、この期間には全く見られなかったことである。さらにこの期間に、どの程度の割合で自分を病気だと感じるか質問したところ、「今はあまり考えなくなった」と答え、疾病に逃避する傾向がやや改善されてきた様子である。

Cは夏休みに限らず今後も継続して勉強していくことの重要性を説明し、Sもそれを求めていることを確信した。

※ ※ ※

数学の理解力と学習への態度をCが認めることによって、Sの自己効力感が高まり、自分に自信を持ち始めたようであった。何より、将来に向けて動き出したことは、大きな手ごたえと安心感をもたらしたようである。

しかしながら学習への取り組みがSの落ち込

みを解消してしまったことは、実は別の視点から見ると対人関係上の問題については、実はそれほど悩んでいないのではないかという問題点を残した。本来ならば思春期であるこの時期に同世代の友人を求めるといった欲求が見られないことは、発達上の問題も視野に入れながらスクールカウンセラーも含めて今後より慎重に対応していかなければならない側面もでてくるだろうと考えられた。

7) 今後の見通し

Sのこれまでの学校との関わり方は、不安が高まったときに限り、安心感を得るために職員室に行くという突発的なものであった。しかし夏休みに数学に取り組めたことによって、これからは数学の学力向上というSにとって価値ある目的を持ち、定期的に宿題をもらいにいくという新たな関わり方が期待される。

このように勉強への興味と自信を満たす場を学校に移すことが、Sが2学期から学校と関わるための最も自然な集団であると言う見通しができた。夏休みの終わりごろ、Cは訪問相談の時間だけでSの勉強を受け持っていくには限界があることを説明し、学校の先生や適応支援センターの先生を利用することを勧めた。また、数学の学習において1学期の範囲が終わり次第、学校に期末テストをもらいにいき、力試しをすることを勧めた。現在はテストに向けて勉強を続けている。

5. まとめと考察

訪問を続ける中で2つの大きな問題が浮かび上がってきた。

1つは、世話焼きで雄弁な母親に受動的に導かれ、思考や会話を母親に委ね自らは放棄していたために、主体的に決断するだけの自我の強さが備わっていなかったことである。そのため小学まではMoに依存することで、大きな葛藤を経験することなく安心して引きこもりがちな生活を送り、不登校の状態を続けることへの違和感は少なかったと思われる。

2つ目はSの社会に理想的な男性のモデルがなく、劣等感を補償することができないまま停滞してしまっていることである。中学に入り、訪問相

談を行う中で、進学や就職など、将来について考えるようになり、これまで依存していた母親もSの将来のことまでは用意できないという現実と直面した。そのとき、Sから「父さんには相談する気になれない」と言われてしまうほど影響力を持たないFaや、Sと同様の問題を抱えるBroでは、十分な男性のモデルにはなりえなかったと考えられる。

このように、Sは葛藤の少ない、あるいは簡単に回避できるような成育史をたどり、問題と直面してそれを乗り越えてきた経験がないために、自我が未熟なまま停まってしまったのだろう。そのため、自分の力だけで現在の問題を受け止め、将来への見通しを立て、充足感や安心感を得ることは困難であったと思われる。これはSの直面する進路など将来への不安が高まるにつれて、家族への攻撃性が高まっていったことから推察されよう。

そうした背景から、介入する焦点は、①母親への過度な依存から自立へ向かうこと。②障害を乗り越えていける自我の力を養うこと。③同一視するモデルをもつこと。④肯定的な自己イメージ(自信)をもつこと、等であった。

その結果、事例でも示してきたように、Sは6ヶ月の訪問を通して、現在おかれている状況を母親のせいにするのではなく、自分の問題として捉えることができるようになっていった。また、将来に向けて高校の情報を調べ、自発的に運動を始めるといった問題解決に向けた行動も表れてきた。さらにCという新たな男性モデルを受け入れ、共同で活動を行うことができた。その中で数学に取り組み、Cの評価を得ることで自信を持ち始めた。

本事例は、教師やスクールカウンセラーの関与に加えて、訪問相談員が直接家庭内で接触することによって、家庭内の母子関係の布置をやわらかく変容し、家庭と学校というまったく異なる場のなかに、新たな交流の場を築くという、いわば、両者の繋ぎのモデルとして機能したのではないかと考えられる。

しかしながら、このようなモデルが全てのケー

スに適合するわけではないため、事前に、本質的に訪問というスタイルがケースに適合するかどうかを判断する必要がある。訪問相談員は間接的な方法でしか児童生徒の状況を把握することができないために、このような判断を行うことは難しい。また、適合する場合であっても、立場や時間的な制限があり、対象も小・中学生であるため、実際に相談者が望む場で身を立てるまで見守ることは難しいかもしれない。しかし中学までの不登校であれば高校で改善が見られやすいという報告を考慮すると、小・中学という初期の段階に、ケースの性質を十分考慮した上で、訪問相談員という形式で引きこもりがちな生活を送る児童生徒を支援していくことは、青年期以降の社会的引きこもりを予防するためにも効果的であると考えられる。

引用文献

- 1) 田嶋誠一 (2001) 不登校・引きこもり生徒への家庭訪問の実際と留意点, 1巻, 2号, 202-214, 金剛出版
- 2) 田中純夫 (1989) T, T. の事例 一戻り場を失った若者に対する訪問指導の過程について一, 千葉大学教育学部教育相談研究センター 教育相談事例集, 第1号, 45-55
- 3) 近藤邦夫 (1985) 教育相談の活動から, 千葉大学教育相談研究センター年報, 第2号, 126-140
- 4) 保坂亨 (2000) 学校を欠席する子どもたち, 東京大学出版

(平成16年10月8日 受付)
(平成16年11月30日 受理)